

特別寄稿

国際表現言語学会発足から7年を振り返る

—国際表現言語学会事務局から見た学会の成長—

野呂博子

ヴィクトリア大学、学会事務局長

SPECIAL CONTRIBUTION

Reflecting the past 7 years since the inception of IAPL: The Executive Director's View on the Growth and Future of IAPL

Hiroko Noro

University of Victoria, IAPL Executive Director

はじめに

早いもので、国際表現言語学会、愛称 IAPL の誕生から丸7年が経とうとしています。発足当時、学会事務局長として7年任務を遂行します、と発足人のみなさんに約束した覚えがあります。なぜ5年や10年というきりのいい年数でなく、7年という中途半端な数を挙げたのか、今となってはそのはっきりとした理由は記憶にありません。今年、還暦を迎えて、なんとなく7年前の自分の気持ちを想像するに、おそらく自分が60になるまで学会を存続させなければ、という責任を感じていたのかもしれない。

自分が決めた任期が終了するにあたり、この会がどのように生まれ、どのように成長していったのかを振り返ることも悪いことではないと、学会誌という、やや硬い紙面で個人的な思いや思い出を中心としたエッセイのような駄文を掲載させていただこうと思いたちました。将来、学会がさらに成長していくのに少しでも、役立てば幸いです。

2006年のプレ学会

学会ホームページにもありますように、2006年の2月にビクトリア大学で「Performing Language: 第二言語教育と演劇に関する国際学会」を開催しました。2006年の1月から平田オリザさんが太平洋アジア学科と演劇学科で客員教授としていらしたのをきっかけに、平田さんがビクトリアに滞在中に何かやろうということで、この会議の開催を計画、実施しました。この会議では、舞台演劇者・言語学者・言語教育者がカナダはもとより、アメリカ、ヨーロッパ、イスラエル、また遠くはアジアやニュージーランドより一堂に会し、様々な理論や言語学的観点から構成されたワークショップや論文を発表し、大きな成功のうちに終了しました。「第二言語教育に演劇を活用する」というテーマに、多くの人たちが関心を持っているという事実を新ためて認識させられた重要な年でした。この学会が好評だったことに気をよくし、翌年、早稲田大学でパート2を開催しようとしたところ、正式な学会でないで早稲田大学を会場に使用できない、ということが判明しました。今だからこそ笑い話にできますが、そのため急遽、国際表現言語学会を

設立する運びとなり、2007年11月に東京の早稲田大学で記念すべき学会としての第一回大会が開催されました。

国際表現言語学会誕生と進化

さてこの学会名ですが、Performing Languageの名づけ親はコーディ・ポルトンさんです。はじめは英語で学会名を考えていて、国際規模でPerforming Languageに関する学会を、ということで、単純にInternational Association of Performing Languageに落ち着きました。表現言語という日本語は平田オリザさん主宰青年団の看板女優である松田弘子さんが使いだしたと記憶しています。早速使わせていただき、日本語名の国際表現言語学会が誕生したという次第です。英語のPerforming Languageにしても日本語の表現言語にしても、あまり聞いたことのない言葉だったのですが、聞いた人の想像力をかきたてるいいネーミングだったことが後々わかります。学会発足当初、関わった人たちの頭にあったのは、「第二言語教育に演劇を活用する」ことでした。しかし、発足人たちの想定をいい意味で裏切り、「表現言語」は一人歩きをいたしました。スポーツ実況をするスポーツキャスターの言語、また落語などの娯楽も、言語を媒体としたパフォーマンスと考えられるというのは、学会に参加されて方たちに教えられたことのほんの一部です。Performing Language、表現言語という曖昧さが多くの人たちのレーダーにひっかかったということでしょう。思ったより言語を媒体にした表現活動に従事され関心をもっている方の多さ、また多様さに驚きました。

国際表現学会のかたち

今まで、大会開催の頻度や時期も定期的でなく、学会らしくない運営をしています。何か機会があると、それと、ワークショップや小さい会議を開催、後援してみたり、と全く行き当たりばったりな会ですが、それも事務局を預かる私の性格を反映しています。もっときっちり運営していきたいと思っていらっしゃる会員の方も多いでしょう。以下に書くことはまったく私の主観ですので、学会の方針と誤解をなさらないでいただきたいのですが、私は現代的なコミュニティのあり方とこの会のあり方が相似形をなしていると感じています。従来の学会は学問領域が決まった研究者同士の交流の場でした。私たちの会は、Performing Language、表現言語という曖昧さが思ってもみない人同士の交流を可能にしました。つまり「言語」と「表現」というキーワードが人の動きのボーダーレス化を促進したと考えられないでしょうか。「Performing Language」コミュニティの誕生で。奥田氏(1997)によれば、現代の多くのコミュニティの内実は「さまざまな意味での異質・多様なものと相互に折り合いながらともに築いて新しい共同生活の規範・スタイル」だそうですが、私たちの「学会」も、奥田氏が定義するところの開かれたコミュニティの様相を呈しているように思えます。広義の言語、表現への関心・興味を軸としながら、いろいろな立場、場所にいる人たちに開かれたもの、またこうした人々によって作られていくものであるのかなあ、とこの会のかたち、あり方について、思っています。

参考文献

奥田道大 (1997) 『都市型社会のコミュニティ』勁草書房。